

平成25年度 夏季展



平成25年 7 月13日(土)

式場間

~ 9 月16日(月)

金沢市立玉川図書館

近世史料館

はじめに

金沢市の南東部の丘陵にある野田山は「野田山墓地」として現在も多く墓があります。その墓地としての始まりは、慶長4年(1599)に没した加賀藩初代藩主前田利家が遺言で野田山に墓を造らせたことによります。その後藩主前田家一族の墓が造られ、藩政期には前田家の「御廟所」とされています。

今回の展示では、藩政期における「前田家御廟所」としての野田山墓地について、当館所蔵の古文書や絵図を通じて紹介します。

前田利家は、天正15年(1587)に兄利久が没した時、「泉野」に葬ったとされていますが、この「泉野」が野田山の可能性があります。利家は遺言で自身の葬地を野田山と指示しています。野田山を選定した理由については、明確ではありませんが、金沢城下を見渡せる「絶景」の地であることは、5代藩主綱紀の伝説の中にも出てきます。

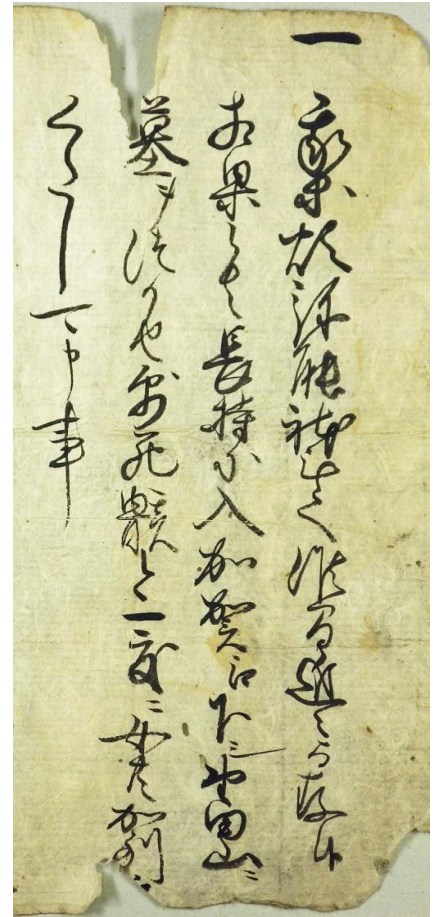
「前田家御廟所」ではありますが、藩政期、藩主家一族全ての人が「御廟所」に葬られたわけではありません。藩主においても2代利長は越中高岡に、4代光高、9代重靖は小立野天徳院に葬られました。藩主の正室については4代から11代までは金沢には居住せず、江戸で葬られました。野田山に葬られるかどうかは、現在のところ一定の基準が見当たりません。その時々藩主の意向が大きいのかもしれません。そして、野田山に葬られなかった一族の墓も、全てではありませんが、明治43年(1910)以降、野田山の「御廟所」へ移葬されています。

なお、藩政中後期の事例ですが、天明6年(1786)に亡くなった10代藩主重教の葬送を中心に、野田山における埋葬の一端を具体的に紹介していきたいと思います。



「下通山川駅路之絵図」(090-593)

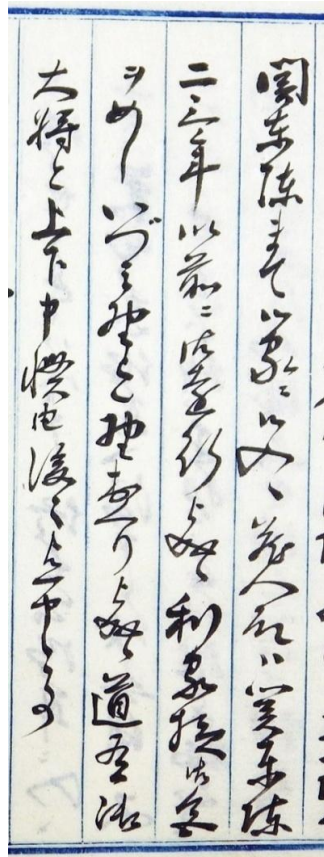
野田山御廟所の始まり



（親文）
一、我等煩、弥能体無之候間、近々と存候
相果候は、長持に入、加賀え下し、野田山に
墓をつかせ、則、死骸と一度に女共加州口
くだし可申事

「前田利家遺書写」
(095.01-2)

「村井重頼覚書」
(16.12-31)



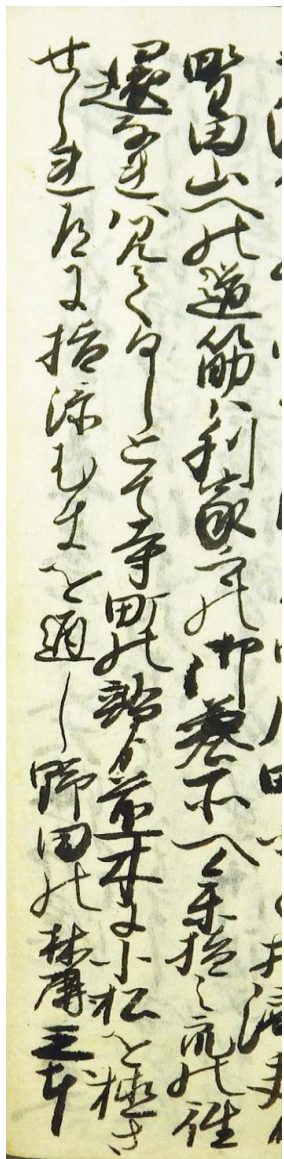
（親文）
関東陣まで御家に御入候藏人殿は関東陣
二、三年以前に御遠行被成候、利家様御色
をめし、いづみ野迄野おくり被成候 道有御
大将と上下申慣由、後々迄申候事

藏人は利家の兄
利久のことで、関東陣
は天正17年(1589)の
小田原征伐のことで
す。

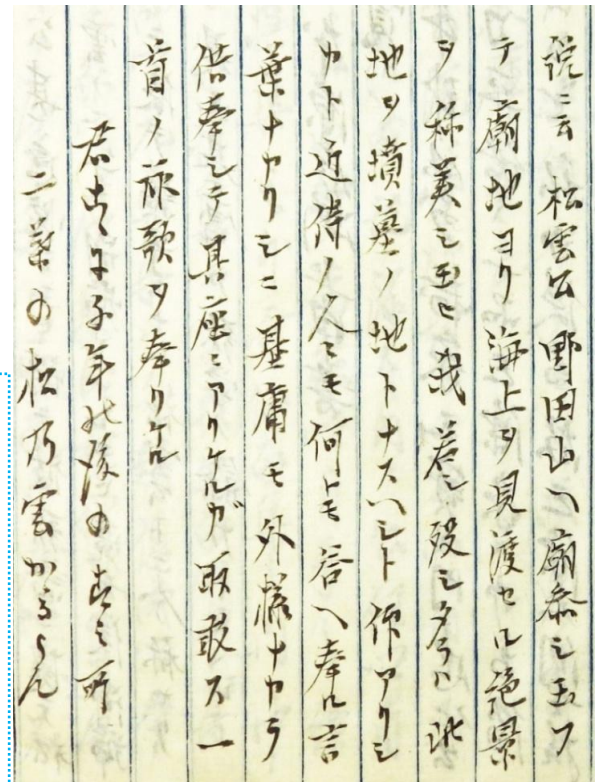
2代藩主利長は利家の墓を
野田山に造り、慶長5年(1600)、
野田山の麓に「野田の宝円
寺」といわれた桃雲寺を建立し
ます。（「寺社由来」16.61-425）

3代利常は、元和頃に城下
の整備とともに、野田山までの
道筋も整備しています。また、
利家墓に隣接するように初代・
2代の正室芳春院・玉泉院の
墓地を整備し、2代利長の拝墓
を整備したのも利常と考えられ
ます。

（親文）
野田山への道筋は、利家卿の御墓所へ参詣の衆の往
還なれば、見ぐるしとて、寺町の端より並木に小松を植さ
せられ、道に指添むまを通し、野田の麓、三本



「三壺聞書」(16.28-12⑦)



「温故集録」(16.28-71)巻45

（親文）
説に云、松雲公、野田山へ廟参し玉ふ
て、廟地より海上を見渡せる絶景
を称美し玉ひ、我、若し没したらば、此
地を墳墓の地となすべし、と仰ありし
かと、近侍の人々も何とも答へ奉る言
葉なかりしに、基庸も外様ながら
供奉して、其座にありけるが、取敢ず一
首の詠歌を奉りける
君ここに 千年の後の すみ所
二葉の松の 雲かかるとん

5代綱紀は、寛文2年(1662)利常の娘で八条宮智忠親王妃であった富が亡くなり、野田
山で葬ります。寛文11年には、利常の正室珠の墓を天徳院から野田山に移しています。
また、自身の早世の子・孫も葬っていますが、それらの配置に綱紀の意図があり、この史
料のように自身の墓位置を決めていたようです。

基庸は山本源右衛門(百石)のことで、室鳩巢に学んでいます。なお、この歌には綱紀院号
が織り込まれています。

藩主前田家一族 野田山被葬者一覧 (明治3年まで 被葬順)

番号	名	続柄等	院号	没年月等	享年	葬地
1	利久	利家兄	真寂院	天正15年8月		泉野
2	初代利家		高德院	慶長4年閏3月	62	野田山
3	蕭	初代娘 中川光重室	瑞雲院	慶長8年11月	41	(野田山)
4	2代利長	初代嫡男	瑞龍院	慶長19年5月	50	拝墓
5	模知	初代娘 篠原貞秀室	清妙院	慶長19年8月	20	野田山
6	幸	初代娘 前田長種室	春桂院	元和2年4月	58	野田山
7	松	初代正室 2代生母	芳春院	元和3年7月	71	野田山
8	福	初代娘 前田七郎兵衛家租	高源院	元和6年7月	34	(野田山)
9	利貞	初代子 前田備前家	江月院	元和6年8月	23	野田山
10	永	2代正室	玉泉院	元和9年2月	50	野田山
11	豪	初代娘 宇喜多秀家室	樹正院	寛永11年5月	61	野田山
12	千世	初代娘 村井長次室	春香院	寛永18年11月	62	野田山
4代光高		3代嫡男	陽広院	正保2年4月	31	(天徳院)
13	3代利常	初代4男	微妙院	万治1年10月	66	野田山
14	犬	3代養娘 前田貞里室	光照院	寛文1年7月	28	(野田山)
15	富	3代娘 八条宮智忠親王妃	真照院	寛文2年8月	42	野田山
16	珠	3代正室 4代生母	天徳院	寛文11年移葬	24	野田山
17	久丸	5代子	性空院	元禄2年6月	1	野田山
18	(某)	5代側室 後奥村斎宮室	長昌院	元禄9年7月		(野田山)
19	雅十郎	5代子	花心院	元禄12年2月	2	野田山
20	美遠	5代側室 後小堀勝経室	円受院	宝永4年9月		(野田山)
21	恭	5代養娘 長尚連室	円浄院	宝永4年12月	42	(野田山)
22	岸	5代側室 後別所重詮室	幽遠院	正徳1年5月		(野田山)
23	保	6代娘	幻空院	享保3年12月	1	野田山
24	5代綱紀	4代嫡男	松雲院	享保9年5月	82	野田山
25	6代吉徳	5代嫡男	護国院	延享2年6月	56	野田山
26	7代宗辰	6代嫡男	大応院	延享3年12月	22	野田山
27	8代重焔	6代2男	謙徳院	宝暦3年4月	25	野田山
9代重靖		6代5男	天珠院	宝暦3年9月	19	(天徳院)
28	流瀬	6代側室 10代生母	実成院	宝暦11年8月	48	野田山
29	10代重教	6代6男	泰雲院	天明6年6月	46	野田山
斉敬		10代2男 11代養子	観樹院	寛政7年6月	18	(天徳院)
30	利命	11代長男 12代養子	香隆院	文化2年5月	6	野田山
31	11代治脩	6代8男	太梁院	文化7年1月	66	野田山
32	喜機	10代側室 12代生母	貞琳院	文政4年10月	60	野田山
33	12代斉広	10代2男 11代養子	金龍院	文政7年7月	43	野田山
34	直	12代娘	藥香院	文政8年3月	17	野田山
35	八尾	12代側室 13代生母	栄操院	嘉永3年11月	62	野田山
36	直会	13代8男 土佐守家養子	清寥院	安政3年2月	10	(野田山)
37	隆	12代正室	真龍院	明治3年6月	86	野田山

『加賀藩史料 編外』他より作成

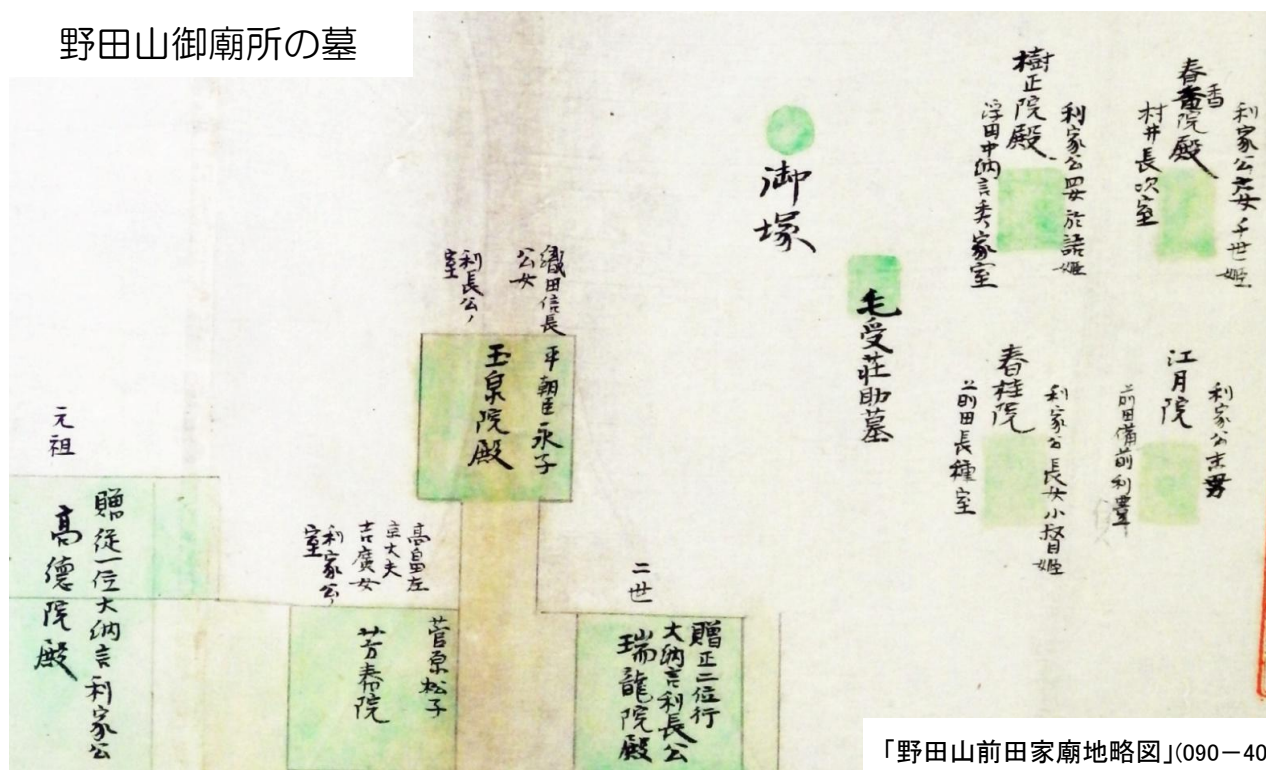
『加賀藩史料 編外』の「系譜」で確認できる藩主前田家一族の野田山への被葬者(明治3年以前)は、利久(泉野)・利長(拝墓)を含めると、37人です。しかし、その中には「前田家御廟所」地内では確認できない墓があります。

そのほとんどは藩臣との縁組によるものであり、そのため野田山地内であるが、「御廟所」ではなく藩臣の墓地に埋葬されたと考えられます。この表の「葬地」で「(野田山)」としたものがそれに当たります。

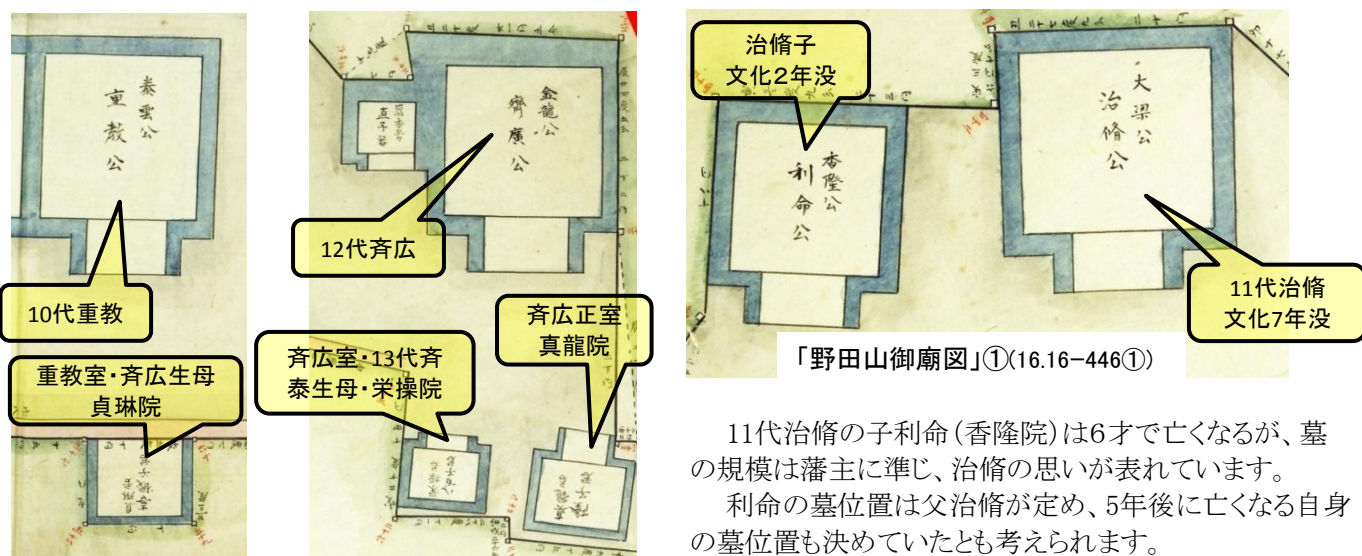
しかし、初代利家の子については、全てではありませんが「御廟所」に葬られています。これは3代藩主利常が、芳春院・玉泉院・瑞龍院の墓地を備える過程で墓地を御廟所内に定めた可能性があります。

利家の子を除けば、野田山御廟所に被葬されたのは、①藩主、②藩主の正室、③藩主の生母(側室)、④藩主の幼少子女の一部、になります。①については4代光高・9代重靖は被葬されず、②③については金沢で藩主より後に亡くなった場合に埋葬されているようです。

野田山御廟所の墓



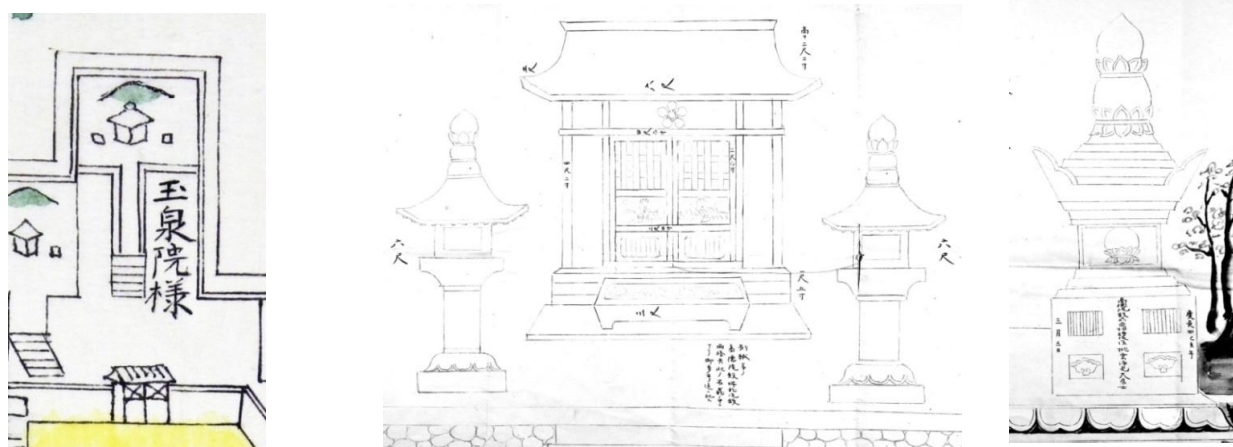
「野田山前田家廟地略図」(090-403)



11代治脩の子利命(香隆院)は6才で亡くなるが、墓の規模は藩主に準じ、治脩の思いが表れています。

利命の墓位置は父治脩が定め、5年後に亡くなる自身の墓位置も決めていたとも考えられます。

藩主墓と向かい合わせに正室および側室(後の藩主生母)の墓を配置する場合があります。貞琳院の墓は斉広が配置し、栄操院・真龍院の墓は13代斉泰が配置したものと考えられます。

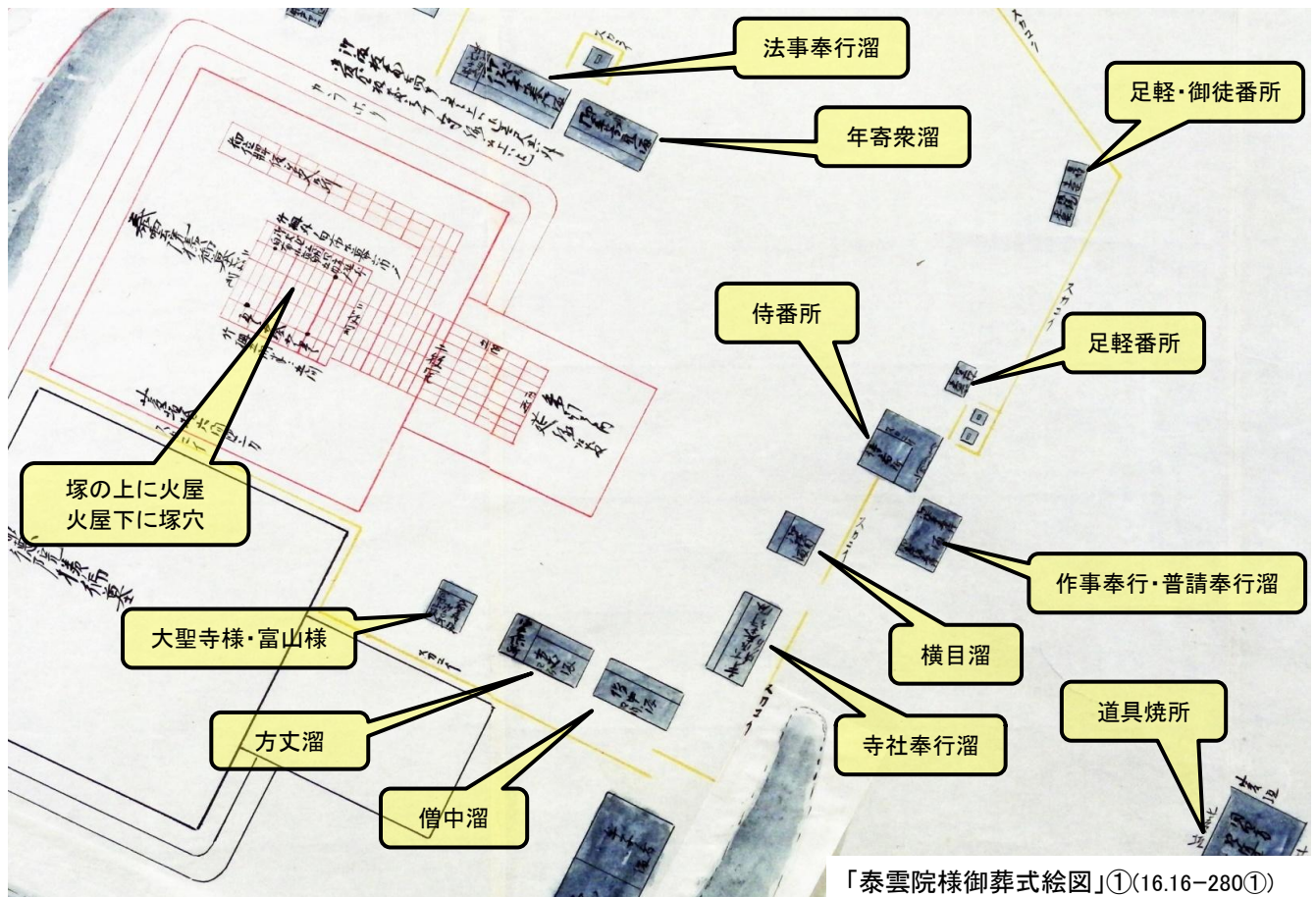


「野田山御廟図」⑥(16.16-446⑥)

「高德院瑞龍院石龕并墓図」(16.61-308①②)

藩政期の野田山御廟所の様子を詳しく示す史料はなく、絵図に略図的に描かれているに過ぎません。左の図では、塚の前に廟とその両側に何かが描かれています。

右の図は「七尾の宝円寺」である長齡寺(利家母の院号を寺号とした寺、兄安勝の菩提寺)にある石堂とその中の宝篋印塔を描いたものです。野田山御廟所もこのような仏式の姿でした。



「泰雲院様御葬式絵図」①(16.16-280①)

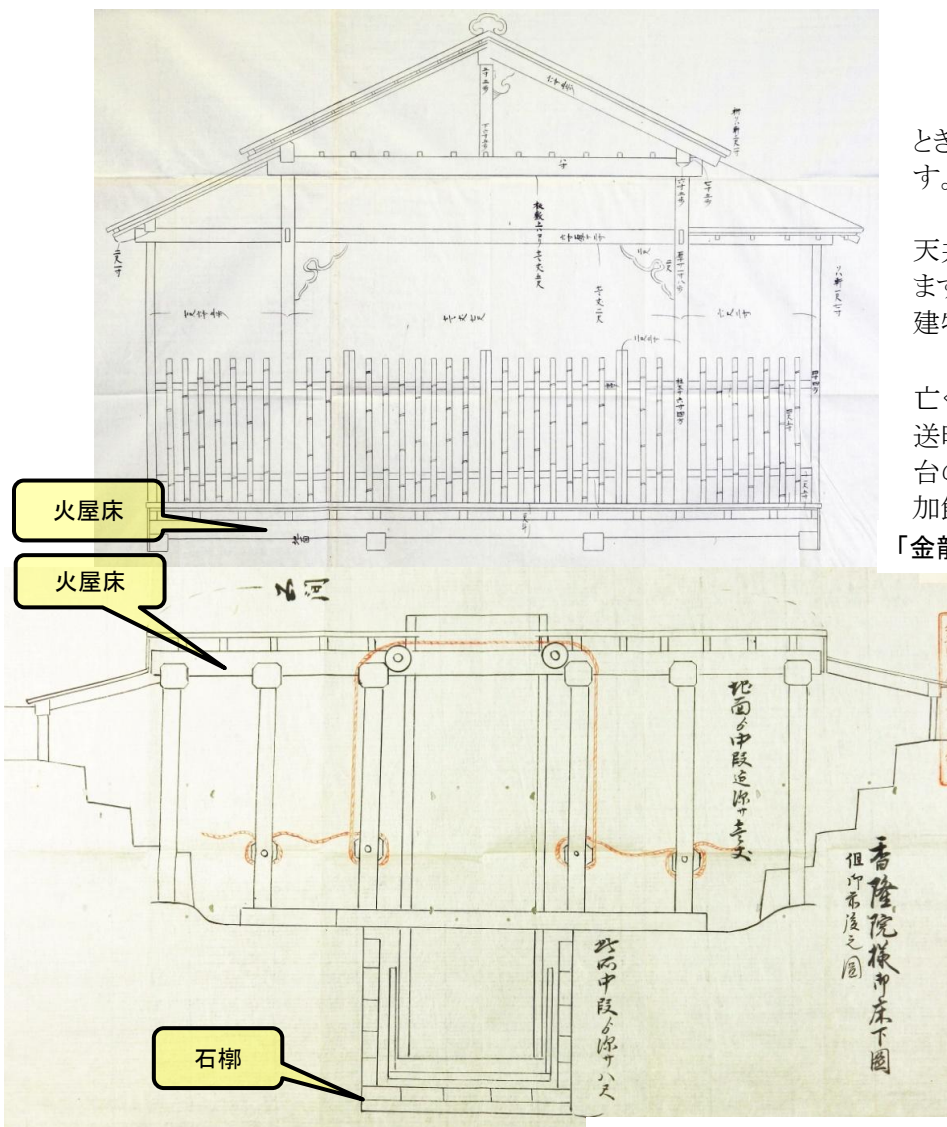
火屋と塚穴

12代藩主斉広が、野田山で埋葬されるとき塚の上に建てられた火屋の図(正面)です。

約5間(約9m)四方の建物で、板敷から天井まで1丈2尺(約3.6m)、竹垣で囲っています。埋葬が終わると解体される一時的な建物です。

「三壺聞書」(巻17)に、元和8年(1622)に亡くなった3代利常の正室珠(天徳院)の葬送時の火屋について、「三間四方に九品蓮台の火屋を建て」「白綾の水引を廻す」など加飾された様子が記されています。

「金龍院様御廟二十分一絵図」①(18.1-42①)



11代治脩の子利命を埋葬する際、塚上に建てられた火屋の床部分とその下の塚穴、および穴底に備えられた石槨等の断面図です。

御棺を滑車と縄で火屋から石槨に降ろす装置の様子がわかります。

この図では塚上面から石槨の底までの深さは1丈8尺(約5.5m)です。

埋葬が終わると、火屋とともに解体し、石槨には石蓋をし、塚穴は土砂で埋め戻されます。

「香隆院様御床下図等」(18.1-41)

御棺と石槨

左図は観樹院の葬送の時の御棺の図です。

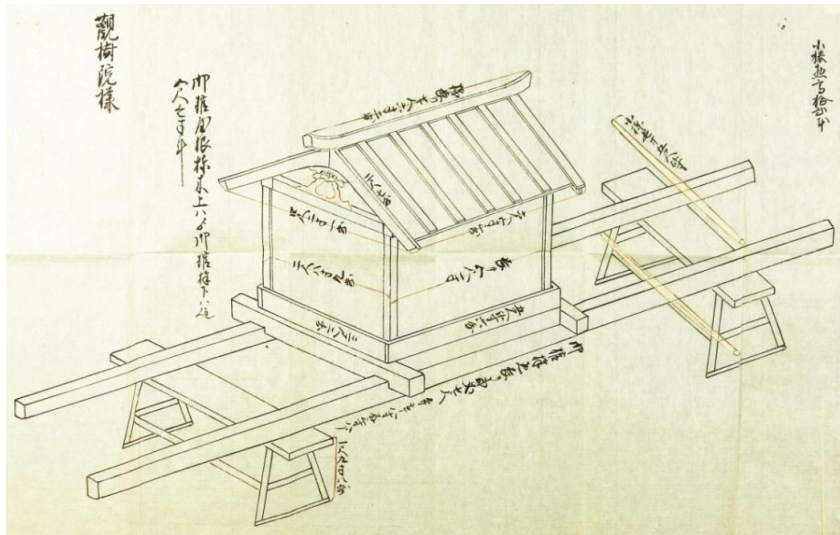
観樹院は10代藩主重教の子で幼名教千代、安永7年(1778)に11代藩主治脩の養子になっています。寛政3年(1791)には佐渡守を叙爵し、徳川家斉の一字を賜わり斉敬と改めています。次期藩主とされていましたが、寛政7年18才で亡くなりました。

葬儀は天徳院で行われ、墓地も天徳院で、野田山には埋葬されませんでした。

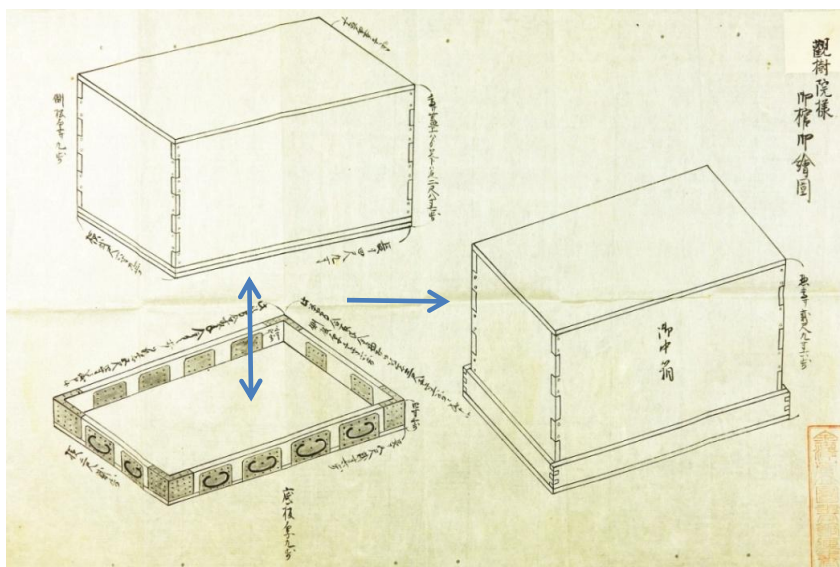
左図(上)は木棺を運ぶための「輿棺」の図、(下)は三重の木棺の「中箱」の図です。

下図(左)は太梁院(11代治脩)埋葬の時の石槨と御棺を上から見た図です。御棺は三重で外箱(草槨 厚約6.7cm)、中箱(檜 約5.5cm)、肌箱(桐 約5.2cm)からなっています。肌箱の外寸は長約177cm、幅約83cm、高約71cmです。石槨と各棺との間には炭・松脂・石灰が詰められています。

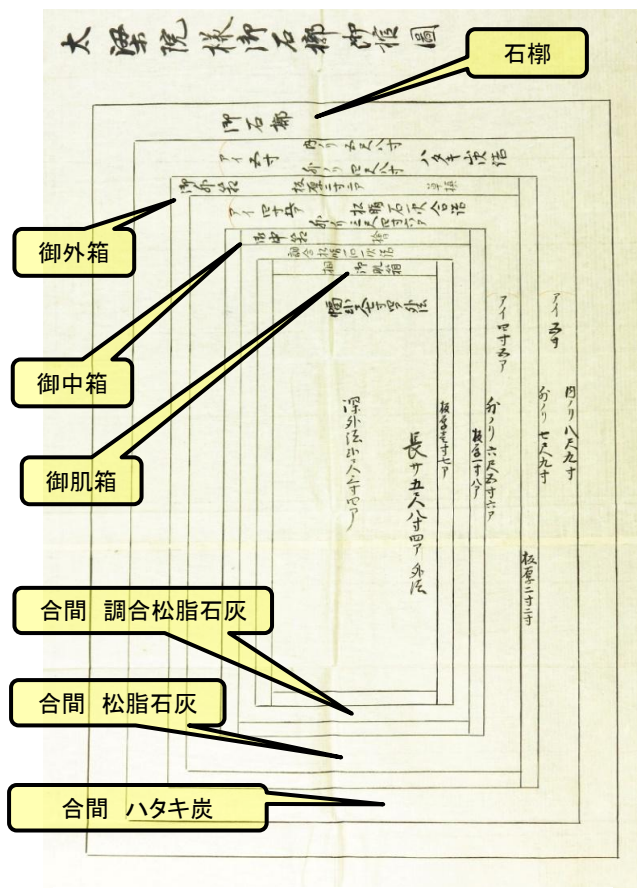
下図(右)は泰雲院(10代重教)埋葬の時の石槨の図です。石槨の内寸は長約271cm、幅180cm、高189cmで、石は戸室石で厚は約18cmです。



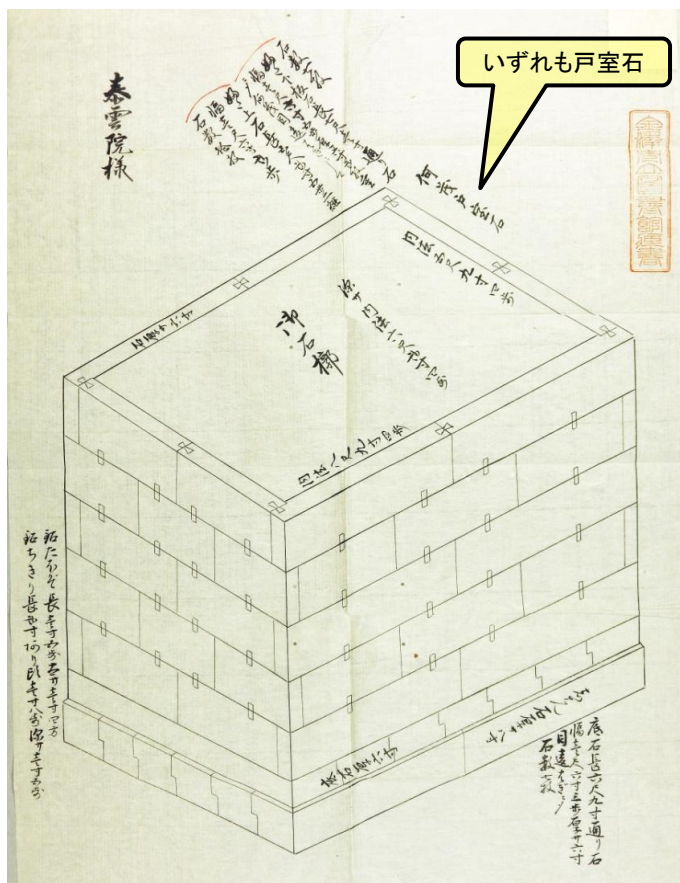
「観樹院様御棺御絵図等」①(18.1-38①)



「観樹院様御棺御絵図等」④(18.1-38④)



「太梁院様御石槨御棺之図」①(18.1-40①)



「泰雲院様御石槨之図」(18.1-39)